

2014 年度

博士論文

主査 須永剛司 教授

副査 濱田芳治 准教授

副査 尼崎博正 教授

指導教員 岸本 章 教授

ニワ文化のデザイン論

—生活における人の動きと空間構成の関係から—

多摩美術大学大学院美術研究科

氏名 堤 涼子

日本の村落を訪れると、住まいと田畑や海、山が合わさり美しい景観を織り成している。これらの生活における屋外空間(ニワ)を、気候や地形などを巧みに読んだ「生活者によってデザインされた環境」として捉えてみたい。デザイン(**design**)という語は、日本において曖昧に使用されている語であり、装飾や意匠とみなされる傾向にあるが、本来はその実践をも含めた計画である。本研究では、生活者が実用や目的をもって形づくった環境もまたデザインであることを明らかにし、そのデザイン論を組み立てることがねらいである。その枠組みとしてニワにおける「人の動き(**action**)」と「空間構成 (**space composition**)」の関係性を実例により捉え、それを分析し考察する。

本研究では、生活者の活動範囲もしくは生活者が活動範囲と認識している空間を表す語として「ニワ」を使用する。この「ニワ」という語は、現代において一般的に使用される庭園を指す語彙よりも広義に捉えられていた経緯がある。また、そのニワの一部である住まいの屋敷地の屋外空間を中心的に取り扱う。「人の動き」と「空間構成」の関係性を解明することでニワが育んだ豊かな文化、つまり「ニワ文化」が見えてくると考えている。また、本研究は多数の事例の集積による分析といった調査研究よりは、デザインの条件を抽出し、設計者・デザイナーの視点からニワを捉える試みである。そして、「ニワ文化」を見直し、生活文化の保護や伝承などこれからの環境デザインの一助となることを目的としている。

第1章にて文献史資料の調査、諸分野の先行研究を踏まえたうえで、フィールドワークにより住まいの現状を確認し、ニワの動向を捉えた。古代におけるニワは平坦な場所を指し、儀式を行う場、人々が共同で作業を行う場であった。しかし、近代において「庭園」の語の登場で、ニワ(庭)とソノ(園)が混同されていく。一方で、民俗語彙のなどから見られるように、生活のなかの日常的側面(ケ：褻・毛・気)と非日常的側面(ハレ：晴)のいずれにおいても、ニワの語は脈々と息づいていたのである。このことから、日常と非日常の両側面からニワの事例をとりあげ、そのあり方を第2章、第3章にて検証する。

また、ニワは諸分野で副次的に取り扱われてきたといった背景がある。ニワに対し、諸分野で研究や議論が行われていない要因として、生活に関する様々な動作が行われる空間であるため、「人の動き」と「空間構成」の関係性を整理し、解明するデザイン論が存在しなかったことにあると考えられる。そこで、本研究ではニワに対しデザイン論としての考察を試みる。また、民俗学の研究である空間を分析する概念である「オクークチ」の秩序に着目し、ニワの秩序を検証する手掛かりとする。

また、伝統的住まいの現状として、土地の用途の変化や生活の中での利用の減少などを要因として、特に建築物から先行し伝統的住まいは減少傾向にあることを見出した。土地の用途の変化や生活の中での利用の減少から、「人の動き」の変化があったことが予想される。ニワの「人の動き」と「空間構成」の関係について考察するには、現在に加えて約30年以前の近過去についても聞き取り調査を行う必要がある。

第2章では、ニワの日常的側面をフィールドワークによる事例の調査から、日常的側面の事例に設定した指標であるエリア区分にてニワのあり方を検証した。エリア区分については生活者を対象にした聞き取り調査から、「作業場(**yard**)」、「庭園(**garden**)」、「前栽畑(**vegetables plot**)」、「屋敷林(**protective grove**)」に分けた。これらにより、用途に適った空

間を造りその配置を行い、気候・地理や生業・家格などに対応したあり方を見出した。

埼玉県草加市の豊田氏のニワ、中山氏のニワでは、主屋の背面である北側に「屋敷林」があり、主屋の正面である南側に「作業場」、「庭園」があるといった、エリアの配置は共通していた。「屋敷林」は屋敷地の北に設けられ、屋敷地内に吹く冬の北から吹く風を防ぐ役割があった。特に、関東平野は平坦な土地であるため、冬季に北から吹く乾燥した「からっ風」を防ぐ屋敷林が発達していた。

茨城県大子町の佐藤氏のニワでは、「屋敷林」と「前栽畑」のエリアが存在していなかった。昭和30年ごろの写真からコンニャクの加工の作業が行われていたことが確認でき、かつては「作業場」以外のエリアが存在していなかったと考えられる。

埼玉県草加市の中山氏のニワと和歌山県串本町の旧鈴木貢氏のニワは、「前栽畑」は屋敷地の北東に位置していた。「前栽畑」は、自家用の野菜などを育てる畑であるため、それらを調理する場所である主屋内の台所に近い位置にある。台所は主屋のなかで、日当たりや風通しが悪い北東側であることが多く、前栽畑も屋敷地の北東に設けられる。和歌山県串本町の旧鈴木貢氏のニワでは、台所と前栽畑の往来がしやすいよう、セメントコンクリート舗装がみられた。

茨城県大子町の佐藤氏のニワと和歌山県串本町の鈴木喜平治氏のニワでは、「屋敷林」のエリアが存在しておらず、山間部である佐藤氏の住まいでは、山の南側に屋敷地を配置し北からの風を防ぐため、「屋敷林」が必要なかったと考えられる。沿岸部の鈴木喜平治氏の住まいでは、海洋の影響を受け年間を通し方位の定まらない風が強く、石垣や生垣、塀、付属屋などで屋敷地周辺を囲っており、「屋敷林」とは別の防風の役割を持つ設備を設けていた。

また、埼玉県草加市の豊田氏のニワ、和歌山県串本町の鈴木喜平治氏のニワでは、「庭園」が大規模に造られていた。名主、庄屋であり、これらの家格の家は集落を納める役職にあり、集落の会議や集落を訪れた賓客をもてなす役割があった。そのため、接客空間を設える必要があった。また、両家のニワは家人だけでなく使用人や地域住人が屋敷地内に入出入りしている一方で、使う人物による空間の分離を明確に行っており、築地塀、四つ目垣などが設けられていた。ただし、観賞の対象となる「庭園」は、小規模な住まいにおいても設けられており、和歌山県串本町の旧鈴木貢氏のニワでは、スイセンなどを植えた花壇が造られていた。

また、日本の民家の屋内空間には、「オクークチ」の秩序が存在する。オクは、「空間的な奥」に加えて「観念的な奥」を含む概念である。「オクークチ」の秩序はニワにも当てはまり、生活者は屋外空間に関しても、その秩序で捉えていたと考えられる。日常におけるニワの指標としたエリア区分では、「作業場」と「庭園」はクチであり、「前栽畑」と「屋敷林」はオクに当てはまる。

茨城県大子町の佐藤氏の住まいでは、「作業場」において、かつて収穫物の選定や加工の作業が親戚・知人を呼び行われていた。多くの人々が出入りする情報や技術の伝達であった。また、かつてそれらの作業が行われていた時は、屋敷地前の畑との間には塀や垣などは特になく、畑と連続的な空間であり、ニワにおけるクチと位置付けられる。和歌山県串本町の鈴木喜平治氏の住まいでは、主屋内の座敷にて会合や賓客の接客を行っており、その際に「庭園」は、観賞の対象とされていた。特定の人物にのみ開かれるクチである。和歌山県串本町の鈴木喜平治氏や埼玉県草加市の豊田氏の住まいでは、家人だけでなく地域

住人がクチだけでなく「前栽畑」などのオクにも出入りしていた。地域住民が使用する井戸や風呂、便所が屋敷地内に設けてあるなど、庄屋や名主は支配階級であり、地域住民を家人と近い存在で捉える意識があったと考えられる。

また、埼玉県草加市の中山氏の住まいや和歌山県串本町の旧鈴木貢氏の住まいでは、北東に「前栽畑」があり、方位的に日当たりが良い事が優先されておらずオクであった。

第3章では非日常的側面をフィールドワークによる事例の調査から、動線を指標に第2章のエリア区分と併せてニワのあり方を検証した。非日常的側面の儀礼・祭祀、芸能の事例から動線に着目し、そのあり方を検証した。その結果、儀礼・祭祀、芸能は「作業場」と「屋敷林」のエリア区分にて行われ、神聖な場へと意味を転換させ、なかでも「作業場」は私的空間から公的空間へと役割を転換させていることを見出した。

埼玉県草加市の豊田家の盆行事では、「屋敷林」がヤマと見立てられていた。「屋敷林」は、日常的側面では防風や防火、防音の役割や建築資材を担保する財産的な意味を持っていたが、盆行事などの非日常的側面では山の神や祖霊の住む神聖な空間という意味に転換していた。同様に「作業場」もまた、外界との境界という意味に転換していた。石川県珠洲市清水町の利長家の踊り庭でも、日常的側面は生業に関する私的空間である「作業場」が、非日常的側面では盆踊りなど祭祀が行われる公的空間へと役割を転換し、また祖霊を慰め再び海へと送る境界へと意味を転換していた。また、これらの外界との境界は、豊田氏のニワでは高灯籠といった仮設物であったが、利長家の踊り庭では物として表層に表れない観念的な境界であった。

利長家の踊り庭でみられた公的空間への役割の転換は、福島県いわき市のじゃんがら念仏踊りや伊勢大神楽でもみられ、芸能が行われている時は「作業場」に誰でも出入りすることが許されていた。踊りや舞が行われている間は、私的空間を公的空間へその役割を転換させると考えられる。「作業場」は、非日常的側面では公的空間になる集落内の社会的交わりを円滑にする場であったといえる。

また、「オクークチ」の秩序を考察すると、豊田家の盆行事でも、クチである屋内の座敷にオクである「屋敷林」から切り出した竹で作った盆棚を設置し、オクとクチで行われている。伊勢大神楽はオクである主屋内の竈祓いを行い、クチである門の前の「作業場」で獅子舞を行うなど、芸能が行われる場所はオクとクチの両空間で行われていた。オクとクチの両空間で儀礼・祭祀、芸能が行われるが、オクは屋内の場合と屋外の場合とあり、屋内外は連続的に捉えられていたと考えられる。

そして、第4章にて、第2章および第3章にて取りあげた事例を基に、生活者によるデザインのやり方と考え方の理屈を提示した。ニワを、日常的側面と非日常的側面にて、現在そして近過去における「人の動き」と「空間構成」という枠組みでみることにより、「人の動き」に含まれる生活者の思考を見出した。また、ニワを「生活者によってデザインされた環境」と読み解くことで、地形や気候などの地理的条件や生業や家格などの社会的条件、信仰心や住意識などの個人的条件が要因(factor)となりデザインされていることが見出された。

ニワのデザインの要因として、生業・家格の差異、意味と役割の転換、関わり合いの密度が「人の動き」から導き出せる。そして、地形・気候の差異、「オクークチ」の秩序、境

界の設置が「空間構成」から導き出せる。それらは、地理的、社会的、そして個人的な要因が複雑に絡み合った条件であった。

また、民俗学で論ぜられてきた住まいの屋内空間を分析する概念である「オクークチ」の秩序が、屋外空間においても踏襲されており、ニワは生活者によって屋内空間と連続的に計画されていることも見出された。またさらに、日常的側面と非日常的側面は生活の「ケ」をリセットする「ハレ」とされてきたが、ニワを形づくるデザイン行為を持続的に行うための変更や修正のタイミングをそこに設けていたとする知見も見出すことができた。

ニワのあり方の変化のなかにはニワの縮小という問題があった。ニワは技術伝達や情報交換の場であり、農作業などの同一作業を通しコミュニケーション能力を養っていたと言える。また、ある特別な日には神や祖霊と交流する場となり公的空間に転化して、祭祀や芸能を介し地域コミュニティを活性化させるといった役割があつ。ニワの縮小は、コミュニケーション能力の低下や地域コミュニティの衰退といった社会的問題へも繋がっている。

生活者によるデザインは無意識のデザインである。事例のなかには、関わり合いの密度の薄い「庭園」と「屋敷林」のエリアに管理不足が見られた。関わり合いの密度といった人と空間の親しみの度合いをニワに対し設定すること自体がデザイン行為と捉えられておらず、それを行われなくなっていることに問題があると言える。ニワといった豊かな空間を存続させていくためには、生活者による自身がデザインに携わっているという自覚とそのデザインへの理解も必要である。

生活者によるニワの「デザイン(形づくる行為)」は、時の流れを内包した持続的なデザインであった。つまり、ニワに対し意味の転換を起こしていた原動力、そしてニワの価値をもたらすための持続的な管理を駆動する力こそが「ニワ文化」であると結論づけることができる。私達は、生活者のデザインに意味と価値を見出すからこそ、それらが美しいと感じられるのである。

本研究で明らかにしたことは、生活者が営みのなかで自らの環境を形づくることを尊重したニワのデザイン論である。これらは新たな環境デザインの指標となり得ると考えられる。本研究の所産を今後の環境デザインの実務に反映させることを次なる研究課題とした。